

「弟子たちへの教え(5)」

ルカ 12 : 49~53

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①パリサイ人の家の食卓で、イエスはパリサイ人たちの儀式主義を糾弾した。

②その直後に、イエスの回りにおびたしい数の人たちが集まって来た。

③イエスは、弟子たちに、そして、群衆に霊的真理を語った。

④これまでに学んだこと

*弟子たちへの教え①(恐れずに証しせよ)

*弟子たちへの教え②(食欲に注意せよ)

*弟子たちへの教え③(心配するな)

*弟子たちへの教え④(その日に備えよ)

⑤今回学ぶこと

*弟子たちへの教え⑤(誤解されることを恐れるな)

*セールスマンの恐れ

*現代のクリスチャンの恐れ

(2) A. T. ロバートソンの調和表

§ 108~110 は、ひとかたまりと考えるべきである。

① § 108 ルカ 12 : 1~59

② § 109 ルカ 13 : 1~9

③ § 110 ルカ 13 : 10~21

(3) 内容

①ルカ 12 : 1~53 弟子たちへの教え 5つのテーマ

②ルカ 12 : 54~13 : 21 群衆への教え 4つのテーマ

2. アウトライン (12 : 35~53)

①恐れずに証しせよ (12 : 1~12)

②食欲に注意せよ (12 : 13~21)

③心配するな (12 : 22~34)

④その日に備えよ (12 : 35~48)

⑤誤解されることを恐れるな (12 : 49~53)

(今回は⑤を取り上げる)

3. 結論：総復習

弟子たちへの教えを通して、イエスから警告と励ましを受ける。

V. 誤解されることを恐れるな(49～53節)

1. 49節

Luk 12:49 わたしが来たのは、地に火を投げ込むためです。だから、その火が燃えていたら、どんなに願っていることでしょう。

(1) イエスは最初、地に平和をもたらすために活動された。

「暗黒と死の陰にすわる者たちを照らし、われらの足を平和の道に導く」(ルカ 1:79)

「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように」(ルカ 2:14)

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから」(マタ 5:9)

「神はイエス・キリストによって、平和を宣べ伝え、イスラエルの子孫にみことばをお送りになりました。このイエス・キリストはすべての人の主です」(使 10:36)

(2) しかし、イエスの公生涯の結果は、地に火を投げ込むようなものとなる。

- ①分裂が起こる。
- ②争いが起こる。
- ③迫害が起こる。
- ④流血事件が起こる。

(3) イエスは、真の平和が来る前に、裁きが来なければならないことを知っていた。

- ①「火」とは、神の裁きのことであるが、特に終末的な裁きを指す。
- ②「火」は、罪を清める働きをする。
- ③それゆえ、その「火」がすでに燃えていたらと、イエスは願っている。
- ④火による清めの後に、真の平和が来るからである。

(4) イエスが十字架にかかるまでは、その火が炎のように燃え上がることはない。

2. 50節

Luk 12:50 しかし、わたしには受けるバプテスマがあります。それが成し遂げられるまでは、どんなに苦しむことでしょう。

(1) 「火によるバプテスマ」

- ①イエスが罪人の身代わりとして受ける裁きのことである。
- ②より具体的には、十字架の死のことである。

(2) この箇所は、ゲツセマネの園での苦悶の前味である。

「いつもの場所に着いたとき、イエスは彼らに、『誘惑に陥らないように祈っていなさい』と言われた。そしてご自分は、弟子たちから石を投げて届くほどの所に離れて、ひざまずいて、こう祈られた。『父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。』すると、御使いが天からイエスに現れて、イエスを力づけた。イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。イエスは祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに来て見ると、彼らは悲しみの果てに、眠り込んでしまっていた。それで、彼らに言われた。『なぜ、眠っているのか。起きて、誘惑に陥らないように祈っていなさい』」(ルカ 22:40~46)

- ①ここでイエスは、弟子たちの誰もが理解していないことを預言的に語っている。
- ②イエスは、必ず十字架の上で死ぬ。
 - *「火のバプテスマ」の代わりに、「この杯」という言葉が使われている。
 - *ともに、神の裁きを意味する言葉である。
- ③イエスは、大いに苦しむ。
 - *ルカは、「汗が血のしずくのように地に落ちた」と表現している。

3. 51 節

Luk 12:51 あなたがたは、地に平和を与えるためにわたし came と思っているのですか。そうではありません。あなたがたに言いますが、むしろ、分裂です。

- (1) イエスは自分を取り戻し、弟子たちの期待を粉碎する。
 - ①イエスの現実主義に注目せよ。
 - ②火による精錬過程を通過せずに、平和を期待するのは、非現実的である。
- (2) イエスの厳しい言葉は、実は、愛の言葉である。
 - ①イエスの奉仕は、結果的に「分裂」を招く。
 - ②イエスの価値観と世界観は、この世のものとは革命的に異なる。
 - ③弟子たちは、消え去る物に固執するのではなく、イエスと同じ価値観に立つべきである。
 - ④イエスは、弟子たちに警告を發し、将来の迫害に対する準備をさせている。

4. 52~53 節

Luk 12:52 今から、一家五人は、三人がふたりに、ふたりが三人に対抗して分かれるようになります。

Luk 12:53 父は息子に、息子は父に対抗し、母は娘に、娘は母に対抗し、しゅうとめは嫁に、嫁はしゅうとめに対抗して分かれるようになります」

- (1) ユダヤ人は、家族の絆を重視する民である。
 - ①イエスのことばは、ユダヤ人たちにとっては驚くべきものである。
 - ②一家が分裂する。
 - ③父と息子、母と娘、しゅうとめと嫁が、対抗して分かれるようになる。

- (2) イエスの招きは、応答を要求する。
 - ①その招きに対して、中立な態度はあり得ない。
 - ②イエスは、人々を二分する。
 - ③イエスは、普遍的な人類愛を教えるために来られたというのは、嘘である。
(例話) フルクテンバウム師の体験
 - * 転居
 - * 無視
 - * 勘当と家からの追放

- (3) それゆえ、イエスを信じない人たちからの誤解を恐れてはならない。
 - ①自分から分裂を仕かける必要はない。
 - ②柔和に、愛を込めて、福音を伝えるべきである。
 - ③弟子道には、他者からの誤解、中傷、迫害が最初から内包されているのである。

結論：イエスの理想主義と現実主義

1. 恐れずに証しせよ（12：1～12）

- (1) からだを殺しても、それ以上何もできない人間たちを恐れるな。
- (2) 殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れよ。
- (3) いざという時には、聖霊の助けが与えられる。

2. 食欲に注意せよ（12：13～21）

- (1) 物に支配されている者は、「愚か者」である。
- (2) 本当の豊かさは、所有している富ではなく、存在そのものにある。
- (3) 地上の富に過剰な関心を抱かず、なくならないもののために労する。

3. 心配するな（12：22～34）

- （1）神が心配してくださる。
- （2）心配しても、状況を変えることはできない。
- （3）不安への対処法は、イエスで心を満たすことである。

4. その日に備えよ（12：35～48）

- （1）常に携拳に備える（いつ起こるか分からない）。
- （2）主イエスは、しもべに仕える主人である。
- （3）主イエスは、しもべに全財産を委ねる主人である。

5. 誤解されることを恐れるな（12：49～53）

- （1）平和が成就する前に、火による清めが来る。
- （2）主イエスの教えは、革命的であるため、人々を二分する。
- （3）主イエスの弟子なら、誤解や迫害は、想定済みのことである。